The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大学生はどんな対人場面を苦手とし、得意とするのか？：コミュニケーション場面に関する自由記述と社会的スキルとの関連
Author(s)	後藤，学；大坊，郁夫
Citation	対人社会心理学研究. 2003, 3, p. 57-63
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/3698
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大学生はどんな対人場面を苦手とし、得意とするのか？
－コミュニケーション場面に関する自由記述と社会的スキルとの関連－

後藤　学（大阪大学大学院人間科学研究科）
大坊 郁夫（大阪大学大学院人間科学研究科）

本研究では、大学生 221 名を対象に苦手（得意）とする対人場面に関する自由記述の内容と社会的スキル（非言語的表出性）との関連性を検討した。自由記述の回答を対人場面での相手と行動の点からテキスト・マイニングツールを用いて整理した後、性別とACT 得点との関連を対応分析、クラスター分析により検討した。大学生は概して、初対面の人との会話、年長者との接し方、顔見知り程度の人とのコミュニケーションに苦手意識を抱いていた。また ACT 得点の高い男性は、より積極的・主張的な対人行動に苦手意識を感じていた。一方、得意な場面に関しては、その場限りの相手に対するマニュアル的な行動が多く挙げられた。女性一般では身内との関係の円滑さが示され、ACT 得点の低い男性では自分の支配力の及びやすい関係が挙げられやすい傾向にあった。これらの結果は、社会的スキルトレーニングにおいて非言語的表出性の程度に応じ訓練プログラムを組むという新たな方策の可能性を示唆するものである。

キーワード：対人場面、社会的スキル、非言語的表出性、社会的スキルトレーニング

問題と目的

人は、誰しも対人関係に悩み、より円滑な人間関係を求めている。しかしながら、私たちの対人関係の悩みは尽きることがない。社会心理学では、人が対人関係を円滑に進めるための要因・条件について多様な観点から研究を進めてきた。これまでの研究を大きく分ければ、1)パーソナリティ研究、2)社会的スキル研究、3)状況要因に関する研究、の3つに分類することができる。

パーソナリティ研究では、円滑な対人関係を支えたり、妨げたりする要因を様々なパーソナリティ特性から説明する。円滑な対人関係につながるパーソナリティ特性としては、外向性、社交性、協調性、主張性といった要因が取り上げられ（Buss, 1986）、そのパーソナリティ特徴の強い人物の対人行動が円滑なコミュニケーションに寄与するであろうと想定されている。また、円滑な対人関係を妨げるパーソナリティ特性としては、内向性、対人不安やシャイネス、抑うつ、孤独感などが特に取り上げられ、臨床社会心理学の立場からは、その改善に向けての試みも提起されている（Leary & Miller, 1986）。パーソナリティ研究の枠組みでは、個人特性による各人の対人行動の特徴を説明し、対人関係を円滑に進めることのできるパーソナリティ、できないパーソナリティが明らかにされてきた。そして、対人関係をより円滑に進めるためには、対人関係に関わる様々な技能の習得が必要となるという考えのもと、パーソナリティと共に研究されてきたのが社会的スキルである。

社会的スキルは、研究者によって実に様々な定義がなされているが（相川, 2000; Argyle, 1988; 菊池・堀毛, 1994 など）、一般的には対人関係を円滑に進めるための能力のことを指す。したがって、社会的スキルに関する研究では、対人関係の未熟さが学習や訓練によって改善・修正できるであろうと想定する。従来の研究では、社会的スキルには記号化（encoding）能力と解読（decoding）能力という下位概念が独立して存在し、両者を並行してスキル・アップさせていくことの重要性が説かれてきた（大坊, 1998）。また、昨今では記号化能力の 1 つとして、他者の立場を十分に考慮した上での適切な主張性（アサーション; assertion）の重要性が指摘され（相川, 2000; 平木, 1993; 和泉・大坊, 1998a, 1998b）、よりセルフモニタリング的な内容をも含む広範な概念として捉えられている。

ところで、社会的スキルという概念は、パーソナリティを規定する要因の一つとしても注目されてきた。対人関係の円滑さに関わるパーソナリティと社会的スキルは概して正の相関関係が高く、最近では社会的スキルという概念を個人特性の一つとして取り扱う研究も多い。しかしながら、パーソナリティの相互作用論的見解（Krahé, 1992）に基づくと、対人関係の円滑さに関する説明にも、個人（person）要因と状況（situation）要因の相互作用的な関係が適用されるべきであろう。対人関係の円滑さに関して個人要因に関わる知見がかなり出揃った現在、状況要因や、個人特性と状況要因の相互作用過程により焦点を絞った研究が望まれるであろう。

対人場面・コミュニケーション状況に関する研究に関して、私たちがどのような場面では円滑にふるまうことができ、どのような場面ではそうできないかということを検討した研究は数少ない。日向野・堀毛・小口（1998）、日向野・小口（2002）は、対人関係における特定の他者に対する苦手意識に関する研究を行っており、対人苦手意識の測

定と実態を報告している。しかしながら、特定の対人場面に関する苦手意識・得意意識について検討した研究はほとんどなされていない。特定のパーソナリティ特徴を持つ人に限定されることなく、多くの人が共通して持つ対人場面での苦手・得意意識を検討することは有意義なことであろうと考えられる。

そこで本研究では、本邦の大学生が特定の場面で感じるコミュニケーションへの惑いや苦手意識と、それに対応させて得意な場面について調査し、対人場面・コミュニケーション状況の観点から大学生のコミュニケーションの実態について整理してみる。大学生が苦手とする(ならびに得意とする)コミュニケーション場面について自由記述データを収集し、その場面の持つ共通の特徴をコミュニケーション相手と相手に対してとる行動に注目して検討した。また、そこで抽出されたコミュニケーション特徴と社会的スキルとの関連性についてもあわせて検討した。ここで得られた結果は、大学生が概して苦手とするコミュニケーション状況を抽出することを可能にし、近年心理学関連の大学教育などで積極的に実践が試みられている人間関係トレーニング(星野, 2003; 津村・山口, 1992)や社会的スキルトレーニングにおいて、どのような場面設定が訓練対象となるべきかを明らかにすることが期待される。特定の対人場面を苦手とする者が何らかの基準で幾つかの群に分けられるとすれば、そのグループに対して異なった訓練内容を適用するといった応用可能性も示唆すると考えられ、一般学生に対する社会的スキルトレーニング適用の可能性を考える上でも一助となるであろう。

本研究では、社会的スキルを測定する尺度として、Friedman, Prince, Riggio, & DiMatteo (1980)の感情的コミュニケーションテスト(Affective Communication Test; ACT)日本語版(大坊, 1991)を用いた。この尺度は、対人場面における非言語的表出性を測定する目的で作成されたが、対人関係における単なる表現力にとどまらず、社会的な積極性(大坊, 1991)、コミュニケーション・パターン(Riggio & Friedman, 1983)との関連も示されている。したがって、コミュニケーションにおける全般的な記号化能力と対人的志向性を簡便に測定する代表的な尺度といえる。

方 法

調査時期

2002年7月に関西の大学文科系学部の2回生を対象とした講義の一部にて実施した。

回答者

大学生247名から回答を得られたが、そのうち性別不明5名、25歳以上の受講生4名(大学院生を含む)、年齢の不明な11名、回答不備のあった者6名の計26名の回答を除いた221名(男性76名、女性145名)のデータを分析対象とした。平均年齢は、21.29歳(20歳～24歳)であった。

調査票

「対人関係・コミュニケーションに関する意識調査」と題し、フェイス項目と自由記述項目、ACT(大坊, 1991)からなる。自由記述項目は、質問1「あなたが、いま現在、対人関係において抱えている悩み、気がかりなことはなんですか」、質問2「あなたが普段、コミュニケーションに戸惑ったり、苦手と感じたりするのはどんなときですか」、質問3「逆に、あなたはどんなコミュニケーション場面を得意にしていますか」の全3問であった。ここでは、そのうち質問2と質問3の分析結果について報告する。回答にあたっては、「相手との関係、おかれている状況など」をできるだけ詳しく具体的に回答するよう求めた。

結 果

データの事前処理

キーワードの抽出 自由記述データの回答について、テキスト型データ解析ソフト「WordMiner(R) Version1.01e」(日本電子計算(株))を用いて、キーワード抽出処理を行った(Table 1)[1]。キーワードの抽出にあたっては、句読点、助詞・接続詞、記号(例えば「、!?)等、キーワードに不適切な字句は削除されるように設定した。

Table 1 WordMiner によるキーワード抽出結果例

ローデータ	キーワード抽出結果
目上の人と話をする時、どの程度の敬語を使えばよいのかでいつも困る。バイト先に新しく入ってきた人が私より年上の場合、敬語を使うべきなのかどうか。	目上 人 話 時 程度 敬語 バイト先 私 年上 場合
バイトや学校で目上の人と話をするとき。	バイト 学校 目上 人 話

キーワードの整理 キーワード抽出処理結果についてコミュニケーション相手と状況説明に関する用語をもれなく網羅するよう適宜修正を加えた。原則として副詞と、相手や状況を示すキーワードとして重要性の低い名詞(例えば「時、前、後、事、私」など)については、キーワードから除いた。また、「人、場所」などの名詞を形容詞・形容動詞が修飾することで、明確な説明要素となっている場合には、「形容(動)詞＋名詞」の形でまとめて1つのキーワードとした。キーワードの整理を経た結果をTable 2に例示した。

その後、最終段階として、同義でありながら回答者によって様々な字句で表現されている言葉について表現の統一を図った。例えば、「友人」、「友達」、「友だち」、「ダチ」、「友」といった各語句は、「友人」というキーワードで統一した。

Table 2 キーワードの整理を経た結果

ローデータ	キーワード整理後
目上の人と話をする時、どの程度の敬語を使えばよいのかでいつも困る。バイト先に新しく入ってきた人が私より年上の場合、敬語を使うべきなのかどうか。	目上の人 会話する 敬語 言葉遣い アルバイト 年上の人
バイトや学校で目上の人と話をするとき。	アルバイト 学校 目上の人 会話する

ACT 尺度による群分け 一方、ACT 尺度の合計得点を算出したところ、回答者の性別による得点差は認められなかった（$t(219)=-.227$, n.s.）。ACT 尺度得点に関する平均値（標準偏差）は全体で 60.43（13.70）、男女別ではそれぞれ 60.15（12.87）、60.59（14.15）であった。以後の分析では、ACT 尺度得点の高さと苦手・得意とするコミュニケーション場面の関連を検討するため、被験者を ACT 高群（70 名中、男性 24 名、女性 46 名；得点範囲 66-101 点）、中群（76 名中、男性 27 名、女性 49 名；得点範囲 56-65 点）、低群（75 名中、男性 25 名、女性 50 名；得点範囲 26-55 点）の 3 群に分割した。各群における ACT 尺度得点の平均値（標準偏差）は、高群で 75.66（8.77）、中群で 60.49（2.49）、低群で 46.17（7.27）であった。

大学生の「苦手」なコミュニケーション場面

苦手場面」に関する分析 質問 2 の回答から得られたキーワードについてコレスポンデンス分析を施した。分析には、WordMiner(R) Version1.01e（日本電子計算(株)）を用いた。説明率の高い順に第 1 次元を横軸、第 2 次元を縦軸としてカテゴリースコアをプロットした（次頁, Figure 1）。そして、キーワードの布置パターンについて ACT 群（高・中・低群）×性別（男・女）との関連をプロット図上で検討した上で、クラスター分析を行った。WordMiner によるクラスター分析では、階層的分類法と非階層的分類法を併用する方式であるハイブリッド法が用いられている（大隅, 2000）。この方法は、大量データの分類操作において、明示的なクラスターの存在があまり期待できず、しかも はずれ値が頻出するといったスコア分布のクセを考慮した分類法である。なお、この分析では、2 度以上の出現頻度を示すキーワードのみを使用した。その結果、以下で紹介する 3 つのクラスターが抽出され、次のような特徴と ACT 群との関連性が認められた（Table 3）。

大学生が「苦手」とする対人場面 キーワードの頻度に注目すると、大学生は全般的に初対面の人や親しくない人との会話、アルバイトなどを通じた人間関係、友人の友人や顔見知り程度の相手などとのコミュニケーションに苦手意識を抱いていることがわかった。さらに社会的スキル（非言語的表出性）との関連を検討した結果、社会的スキルの低い男女や高い女性は、親しくない人との会話に対する困惑や、未知の人物に対する人見知りを共通して訴える傾向にあった。これに対して、社会的スキルの中程度の者は、顔見知り程度の相手との接し方に不安を感じていた。顔は知っているが、決して親しくはないという微妙な相手に対して、あいさつをすべきか、敬語を遣うべきか、会ったときに何を話すかといったことに戸惑いがあることがうかがえる。加えて、アルバイトでの人間関係も多く挙げられたが、ここでの人間関係は、接客での振る舞いに対する苦手意識というよりは、アルバイト先の上司や同僚に対する接し方に対する不安であることがわかった。

Table 3 「苦手場面」に関するクラスター分析結果

相 手		行 動	
第 1クラスター：「初対面・親しくない人との会話」			
初対面の人	42	会話する	94
目上の人	19	人見知りする	6
親しくない人	15	話しかける	4
1対 1	14		
大勢	11		
ACT低群男性・女性、ACT高群女性			
第 2クラスター：「積極的関与」			
知り合い程度	5	意見を言う	4
サークル	3	グループに加わる	3
少人数	3	対応	3
ACT高群男性			
第 3クラスター：「顔見知りへの接し方・マナー」			
アルバイト	24	接する	16
友人の友人	11	会う	15
顔見知り程度	11	あいさつ	6
後輩	9	話題ふる	5
年下の人	8	敬語	5
ACT中群男性・女性			

その一方で、社会的スキルの高い男性は、より積極的で主張的な対人行動に苦手意識を抱いていることがわかった。既存の集団に新たに加わっていったり、知り合い程度の相手にも遠慮なく自分の意見を述べたり、といった他者との関係性を考慮した上での関わりを多く挙げていた。したがって、社会的スキルの高い男性は、より高度でアサーティブな対人的スキルに目を向けていたのである。

大学生の「得意」なコミュニケーション場面

得意場面」に関する分析 質問 3 の回答に対して同様にコレスポンデンス分析を行い、説明率の高い第 1 次元（横軸）、第 2 次元（縦軸）のカテゴリースコアを Figure 2 にプロットした。その布置パターンと ACT 群との関連を検討し、その後クラスター分析を施した。その結果、以下の 3 クラスターを抽出した。各クラスターの特徴と ACT 群との関連性を Table 4 に示す。

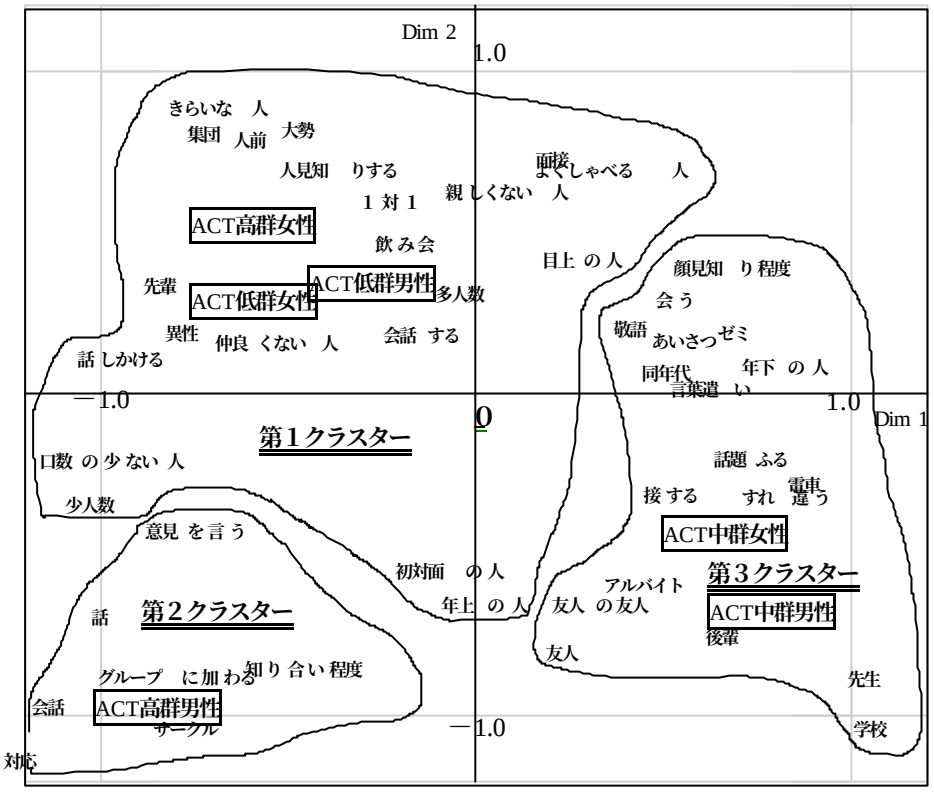

Figure 1　苦手場面」についてのプロット図と3 つのクラスター

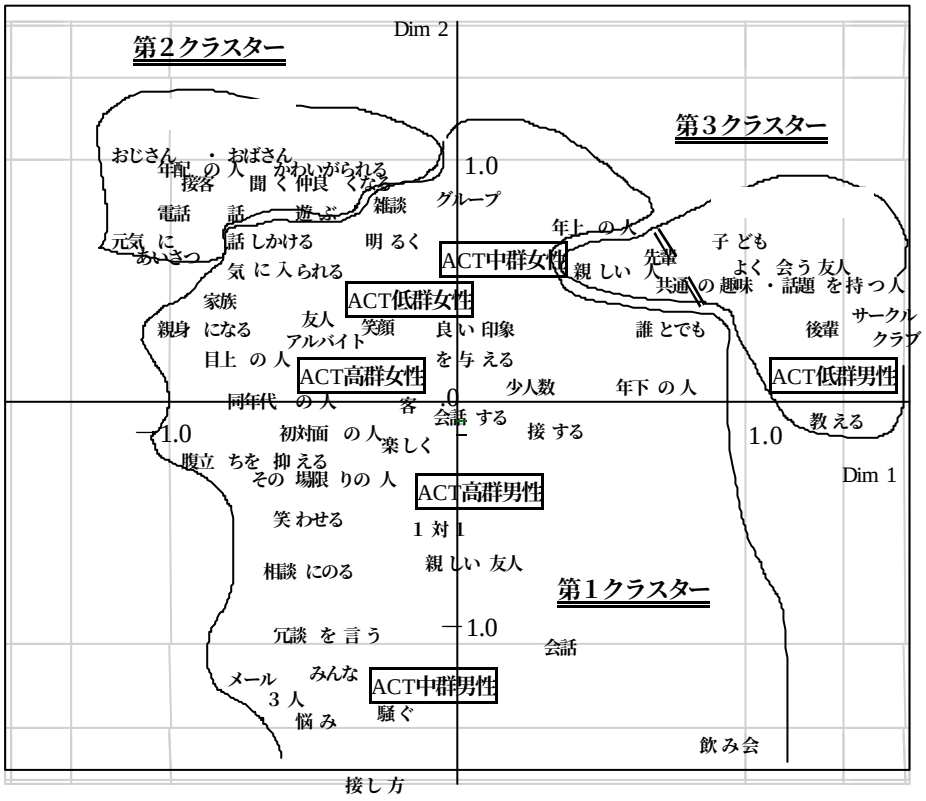

Figure 2　得意場面」についてのプロット図と3 つのクラスター

Table 4 「得意場面」に関するクラスター分析結果

相手		行動	
第1クラスター：「幅広く他者と接する」			
初対面の人	45	会話する	63
アルバイト	37	接する	32
親しい友人	18	笑顔	29
目上の人	12	仲良くなる	8
1対1	11	相談にのる	7
ACT中群男性、ACT高群男性			
第2クラスター：「身内とのつき合い」			
おじさん・おばさん	2	あいさつ	4
年配の人	2	かわいがられる	3
家族	2	聞く	3
女性（ACT群に関わりなく）			
第3クラスター：「限定的な相手との関係」			
子ども	9	教える	3
先輩	7		
共通の趣味を持つ人	4		
ACT低群男性			

「大学生が「得意」とする対人場面　キーワードの頻度に注目すると、大学生は全般的に初対面の人に対する接し方や、アルバイトでの接客と笑顔での対応、親しい友人との関係を得意と報告していた。ただし、社会的スキル（非言語的表出性）との関連を検討すると、スキルの低い男性や、一般的に女性は、これ以外の特徴的な場面を挙げていることがわかった。女性は、出現頻度が少ないものの、家族や親戚、年配の人に積極的にあいさつをしたり、相手の話をよく聞いたりし、自分がかわいがられていると感じていた。

また、非言語的表出性のあまり高くない男性は、非常に限定的な人間関係を得意なコミュニケーション場面として報告している傾向にあった。子どもや先輩、共通の趣味・話題を持つ人といった、ある程度安定した関係や自分の支配力・勢力の及ぶ関係でのみ、その対人場面を得意であると回答していることが示唆された。

考　察

本研究は、現代大学生の苦手（得意）とする対人場面を明らかにし、そこで抽出されたコミュニケーション状況と性別ならびに非言語的表出性との関連性を探索的に検討することを目的とした。大学生が苦手と報告した対人場面と、得意と報告した対人場面をそれぞれ検討した結果、大学生全般にある程度共通する苦手場面・得意場面が存在した。

初対面の人物とのコミュニケーション

大学生は苦手なコミュニケーションの相手として「初対面の人」との関係を最も多く挙げていたが（Table 3）、それと対応して得意なコミュニケーションの相手としても「初対面の人」との関係を最も多く挙げた（Table 4）。しかしながら、苦手な状況と得意な状況のそれぞれにおける「初対面の人物とのコミュニケーション」は、おそらく意味するものが異なると考えられる。「苦手場面」における「初対面の人とのコミュニケーション」とは、Table 3の第1クラスターからも示唆されるように、未知の人物との関係の初期段階で生じる振る舞いの困難さや人見知りといった事象を多く想起したことによる。また、ここでいう「人間関係」は、ゼミやサークルなど、大学内での様々な相手との関係や、バイトの同僚との関係など、その後の関係が長期的に展望されていることが特徴であるといえ、その時その時の適切な振る舞いに戸惑う学生の実情を示したものといえる。

これに対し、「得意場面」における「初対面の人とのコミュニケーション」は、多くの報告がそうであったように、アルバイトを通じた接客のことを指している（Table 4の第1クラスター）。同じ「初対面」とは言っても、「苦手場面」で挙げられた関係性とは違い、相手との関係が一時的もしくは短期的で、その場限りの相手との関係についてのみ、大学生は得意だと感じていた。この種の関係間でのコミュニケーションでは、相手に対する対応の仕方がマニュアル的に決まっていたり、相手からのフィードバックが多くなかったりするため、迷うことなく相手に笑顔で接することができるのであろう。

大学生は、どんな場面を苦手・得意とするのか？

以上のことを含め、本研究では、現代大学生が全般的に「苦手」とするコミュニケーション状況と、「得意」とするコミュニケーション状況とを抽出することができた。大学生は、初対面の人物との出会い、特にその後の関係性が長期的に見通される人との出会いにおいて、多くの戸惑いや不安を共通して経験している。また、友人の友人、アルバイトの上司や同僚、顔見知り程度の相手など、挨拶をすべきか、敬語をつかうべきか迷ったり、どの程度うち解けて接していいか迷ったりするような関係の相手とのコミュニケーションに対しても、共通して苦手意識を報告していた。この知見は、日本人の対人恐怖傾向が「初対面の人よりもむしろ、少し見知った相手（「半知り」笠原, 1977）」、「中間的人間接触場面（高橋, 1976）」）に対して生じやすいとする主張と一致する点で興味深いが、このような関係性では、相手が自分に対してどの程度親密さを感じているのか、相手は実際にどの程度自分に親密に接してくるのか、相手の出方を観察しつつ、振る舞う必要性がある状況といえる。この種の状況では、相手に対する行動が、この場に適切なものなのかどうか、綿密にセルフモニターする必要があるといえ、初対面の人物とのコミュニケーション以上に高度な対人的スキルが要求

される状況だともいえる。

また、その一方で、アルバイトでの接客場面を中心とする相手に対するマニュアル的な対応を、多くの大学生は得意なコミュニケーション場面として挙げている。その場限りの相手に対して、笑顔で愛想よく振る舞うといった対人的スキルは、アルバイト等の経験を通してかなり身についているといえるのかもしれない。加えて、女子学生の中には、少数ではあるが、家族・親類との関係を得意なコミュニケーション状況として挙げる者がいた。身内にかわいがられるように振る舞うスキルは、確かに男子学生と比較して女子学生でより富んでいるものと容易に想像することができるが、今後より多くの対象者のデータを収集した上で検討する必要があるであろう。

以上を総合すると、大学生が共通して得意としたコミュニケーション状況は、相手との関係が基本的に短期間で、コミュニケーションの流れがその当初から予想できたり、相手との会話のラリーが非常に少なかったり、相手からのフィードバックが非常に少なかったりするといった共通した特徴が浮かび上がってくる。このような状況で大学生が必要とする社会的スキルは、「一時的な」スキルとでも呼ぶべきものであり、決してさほどの難しい技能ではなく、全てのコミュニケーションに応用できるスキルでもない。

これに対し、大学生が共通して苦手とするコミュニケーション状況は、相手との関係が長期的に想定されている。そのため、そこでのコミュニケーションは、関係維持という目標のもと、相手からのフィードバックにより注意を向け、それに適切に応答し、会話自体も長く維持することが求められる。従って、大学生は、このような状況のもとでは、より「持続的な」スキルを活用する必要が出て来よう。ここで言うところの「一時的なスキル」と「持続的なスキル」は、要求される行動と目標からして階層性を成しており、持続的なスキルはより高次の社会的スキルと考えられる。大学生に対する社会的スキル教育においては、この高次のスキルの養成が今後より求められるであろう。また、「一時的なスキル」を「維持すべき関係」に誤って適用させて行動すれば、実生活ではコミュニケーションに不自然さが生じるはずである。今後の社会的スキル実習などでは、実生活において低次のスキルを「維持すべき関係」に適用させてはいないかどうか、振り返る機会を持ったり、その不自然さを実際に体験させたりするプログラムを組み入れることも有効であろう。

対人場面と社会的スキルとの関連性

本研究で抽出された、苦手・得意な対人場面と社会的スキルとの関連性を検討した結果、ACT の高い男性と ACT の低い男性で特徴的な状況が抽出された。社会的スキル（非言語的表出性）の高い男性は、知り合い程度のメンバーの集まりの中に加わっていったり、サークルなどの集まりで発言したりといった、より主張性を求められる状況に対して苦手意識を抱いていた。なぜ、社会的スキルの高い男性だけがこのような状況に対して苦手意識を感じるのかは明確でないが、男性は社会生活の中でリーダーシップなどの主張的な行動をより頻繁に求められる傾向にあり（Argyle & Henderson, 1985）、社会的スキルの高い男性はとみにその傾向が強いために、その状況に戸惑い、苦手と報告することが多くなったのかもしれない。

また、その一方で社会的スキル（非言語的表出性）の低い男性は、子どもにものを教えたり、部活やサークルの先輩とうまく付き合ったり、共通の趣味・話題を持つ人との関係など、自分の勢力が及びやすい関係や安定した関係に対して得意な意識を持っていることがうかがわれた。このような社会的スキルによる状況差には、スキルの低い男性が、高い男性と比較して、他者に対して自分の存在を示すようなスキルを用いていないことが考えられるであろう。社会的スキルの低い男性は、様々な関係性の相手との友好的なつながりを求め、それを少しでも維持しておくことに苦慮している。これに対し、社会的スキルの高い男性は、友好的なつながりを求めるだけでなく、その中で他者に自分の存在をぶつけるようなコミュニケーションのとり方も積極的に試みている。ここにも「友好的つながりの維持」スキルと「自己をぶつける」スキルという社会的スキルの階層性を見出すことが可能である。もちろん、社会的スキルの低い男性が、このような限定的な関係でのみ上手くコミュニケーションをとれていると本研究の結果から断言することはできない。今後の研究では、コミュニケーション状況と社会的スキルの関連性の検討を、性差も含めてより精緻に行うことが必要となるであろう。

社会的スキルとコミュニケーション状況に関する苦手意識との関連性を明らかにすることは、現代大学生の人間関係をより包括的に理解することにつながる。大学教育では、人間関係トレーニングや社会的スキルトレーニングをカリキュラムに組み入れることで人間関係のより一層の充実をはかる試みが行われている。今後、社会的スキルとコミュニケーション状況についての苦手・得意意識、ならびに性別との関連性をより詳細に検討し、社会的スキルの階層性をより緻密に構造化することにより、苦手・得意意識の内容に応じたトレーニングプログラムの作成が可能になるであろうと考えられる。

引用文献

相川 充 2000 人づきあいの技術? 社会的スキルの心理学? サイエンス社

Argyle, M. 1988 *Bodily communication* (2nd ed). Metheun.

Argyle, M., & Henderson, M. 1985 *The anatomy of relationships and the rules and skills to manage them successfully.* Penguin Books.（『人間関係のルールとスキル』吉森護 編訳 北大路書房 1992）
Buss, A.H. 1986 *Social behavior and personality.* LEA.（『対人行動とパーソナリティ』大渕憲一 (監訳) 北大路書房 1991）
大坊郁夫 1991 非言語的表出性の測定：ACT 尺度の構成 北星学園大学文学部北星論集, **28**, 1-12.
大坊郁夫 1998 しぐさのコミュニケーション? 人は親しみをどう伝えあうか? サイエンス社.
Friedman, H.S., Prince, L.M., Riggio, R.E., & DiMatteo, M.R. 1980 Understanding and assessing nonverbal expressiveness: The affective communication test. *Journal of Personality and Social Psychology*, **39**, 333-351.
平木典子 1993 アサーショントレーニング? さわやかな＜自己表現＞のために? 金子書房
星野欣生 2003 人間関係づくりトレーニング 金子書房
日向野智子・堀毛一也・小口孝司 1998 青年期の対人関係における苦手意識 昭和女子大学生活心理研究所紀要, **1**, 43-62.
日向野智子・小口孝司 2002 対人苦手意識の実態と生起過程 心理学研究, **73**, 157-165.
和泉鉄平・大坊郁夫 1998a 社会的スキルと自己主張に関する研究の課題と展望 1 北星学園大学大学院論集, **1**, 21-37.
和泉鉄平・大坊郁夫 1998b 社会的スキルと自己主張に関する研究の課題と展望 2 北星学園大学大学院論集, **2**, 1-30.
笠原 嘉 1977 青年期? 精神病理学から? 中央公論社
菊池章夫・堀毛一也 1994 社会的スキルとは 菊池章夫・堀毛一也 (編) 社会的スキルの心理学, pp. 1-22 川島書店
Krahé, B. 1992 *Personality and social psychology: Towards a synthesis.* Sage.（『社会的状況とパーソナリティ』堀毛一也 (編訳) 北大路書房 1996）
Leary, M.R. & Miller, R. S. 1986 *Social psychology and dysfunctional behavior.* Springer-Verlag（『不適応と臨床の社会心理学』安藤清志・渡辺浪二・大坊郁夫 (訳) 誠信書房 1989）
大隅 昇 2000 調査における自由回答データの解析 ? InfoMiner による探索的テキスト型データ解析? 統計数理, **48**, 339-376.
Riggio, R.E., & Friedman, H.S. 1983 Individual differences and cues to deception. *Journal of Personality and Social Psychology*, **45**, 899-915.
高橋 徹 1976 対人恐怖? 相互伝達の分析? 医学書院.
津村俊充・山口真人 (編) 1992 人間関係トレーニング? 私を育てる教育への人間学的アプローチ? ナカニシヤ出版

註

1)WordMiner(R)は、日本電子計算株式会社によって制作・開発されたソフトウェアで、膨大な質的データの解析が可能である。本ソフトウェアでのテキスト型データの分かち書き・キーワード抽出機能は、株式会社平和情報センターの Happiness(R)/AiBASE により提供されている。

Open-ended questions about the communication situation and social skills

Manabu GOTO (*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)
Ikuo DAIBO (*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)

The present study was designed to examine the relationship between the dislikable/likable communication situation and the degree of social skills. The contents of the interpersonal situation were summarized by the text mining software. Correspondence analysis and cluster analysis of data from 221 undergraduate students showed the following 5 findings. (1) Undergraduate students were not generally good at communicating with the strangers, the old, and acquaintance. (2) The nonverbal expressive males were not good at appealing assertively. (3) On the other hand, undergraduate students perceived themselves generally to be good at communicating like as the manual says. (4) Female students perceived themselves to be good at the interaction with relatives. (5) The low nonverbal expressive males were good at behaving in the dominant relations. These consequences were discussed from viewpoint of the application to the social skills training.

Keywords: interpersonal situation, social skills, nonverbal expressiveness, social skills training